

---

# 『懺悔の時間』

巡芳もとめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『懺悔の時間』

### 【ZPDF】

Z8926W

### 【作者名】

巡芳もとめ

### 【あらすじ】

軽い気持ちでクラスメイトの雪兎ゆきとをからかつたことから彼の怒りを買い、長期に渡る懺悔をするはめになつた聖ひじり。一体あと何回懺悔すれば解放されるのか。そんな懺悔の日々の中で、それまであまり言葉も交わしたことのなかつた一人の関係がだんだん変化していく。

## 「懺悔の日々のはじまり」

「これでもかといつほど上から田線で俺を見下ろす雪兎。<sup>ゆきと</sup> 眼鏡越しにのぞくその目は冷血人間そのもの。偉そうな態度で腕を組み足を開いて座る奴の前に俺はひれ伏す。

「聖、<sup>ひじり</sup> 懺悔の時間だ。今日も俺に許しを乞うえ」

「一体あと何回懺悔すればいいんだ。何回許しを乞えば許しを得られるんだ。」

「くつそ……ムカつく」

小声で悪態づいたつもりだったが、雪兎におもいきり頭を叩かれた。両手で頭を抱える俺。

事の発端は、俺がふざけて雪兎の眼鏡を奪つたことに始まった。些細なことだ。悪気なんてなかつたし、休み時間まで熱心に教科書を読み予習復習している奴をからかおうと、軽い気持ちで眼鏡を奪い取つた。ただそれだけの事だったのだが……。

「俺はな、眼鏡取つた顔を人に見られることが嫌なんだよ。おまえにとつては些細なことかもしれないが、俺にとつては、地球が滅亡するくらいの一大事なんだよ……」

怒りに震えぶち切れながら俺の胸ぐらを掴んで雪兎は言った。

「そんなにつ！？」

彼の例えの規模があまりに想像を越えすぎて、俺はついつかさずつつこみを入れてしまった。そのつつこみによつて更に彼からの怒りを買うはめになつた俺。

「おまえのような女みたいな軟弱な顔した奴には俺のコンプレックスなんて到底理解出来ないだろうな」

コンプレックスなんてあつたんだと俺は首をひねつた。なぜなら、雪兎は自覚こそないものの、近所にある女子高の女子たちからもモテていたからだ。ちやらけた俺とは正反対の秀才系のクールな外見。眼鏡が似合うイケメンとして追っかけもいる。なのにコンプレック

スだなんて贅沢極まりない野郎だと思つた。

しかし尋常ならぬ怒りを買つてしまつた俺は、授業が終わると毎日いつして奴の前に土下座をせられ、反省の言葉を述べさせられるはめになつた。

この懺悔の日々もとうとう1ヶ月にならうかとしていた。

「おまえどうすぎだぞ…」

と言ひ返したこともあるが、雪兎は、「おまえのやつた行為こそが、この上ならぬドS行為だ。このサゲイストがつ…！」

と吐き捨てやがつた。えー……と納得いかない声を漏らす俺の頭を奴はまた叩いた。そのうち足で頭を押さえつけられるのではないかと思つと、俺の心は折れそつた。

## 「やんせんな朝」

まま「じるじる」のみに俺と雪兎の懺悔「じ」は続き、一向に俺を解放してくれる気配もなく今日も朝を迎える。

校門を前にして、はあ、と溜め息をついた瞬間「おい」と呼び止められ俺は振り向いた。

雪兎は自慢の眼鏡をキラリと光らせ、

「今日はおまえに頼みがある」

と笑いもせずに言った。この上にまだ俺に何かやらすつもりか。

「冗談じゃねーよ……」

そんな俺の言葉も却下され、朝っぱらから俺は雪兎にぐいぐい腕を引っ張られ屋上へと連れて行かれた。

ゼーゼー息を切らしながら屋上へと続く階段途中、俺はふと嫌な予感が頭をよぎったが、バカバカしいとその考えを抹消した。

「暑つ」

太陽にじりじりと焼かれる屋上の地面。靴の上からでもその暑さが伝わってきた。

「で、頼みつてのはだ」

振り返り雪兎は俺の茶髪のもじやもじや頭の上に手を置いた。急に何なんだ気持ち悪いーな、と拒絶する間もなく、奴は俺をハグした。

「……え？ 何これ？」

ただされるがままに立ちつくす俺。

「あいつの前でだけ、恋人を演じて欲しい」

俺の耳元で雪兎は言った。「奴って誰？」と小声で問い合わせ後ろを振り返ったとき、視界に怪しい人影がちらりと見えた。いや、正しくはだいぶさつきから気がついていた、その背後にある気配に。だから嫌な予感がしていたんだよ。振り返る俺の顔を自分の方へ手でぐいっと向かせる雪兎。

「あれって……」

と喋りだそうとする俺の言葉を雪兎は「しつ」とさえぎった。

屋上に入る扉の向こうに何者かがいる。あれって、確かに噂で聞いたことはあるが、雪兎に何度も告つてくるつていう、あの何だっけ、名前が確か……

「惺だ」

うちの男子校には妙なルールがあつて、親近感を深める作戦なんか、みんなお互いがお互いを下の名前で呼び合つとこう決まりがある。入学した当初は何だそりやと思つたものだが、もうすっかり慣れてしまつて、いる自分がいる。

「あ、そうそう惺。で、だからつて何で俺がそんな面倒臭エことしないとならないんだよ」

「おまえ罪人だろが」

ハグをやめて急にまた態度でかく振る舞い、ついには俺を罪人扱いまでする雪兎。

これだけ毎日俺をいたぶつておきながら、更に過酷な難題を課そうというのか。何て奴だ。しかもそのためなら、こいつして平氣で自分が嫌いな奴にも抱きつくなよ。

「とにかく惺の前ではおまえが俺とデキてるつてことにして」

「何でだよ」

「おまえは罪人だからだよ。これも刑の一環だ。喜んで従事しろ」

背後にまだその気配がある。

「あいつの変態性としつこさにはうんざりしてる。お前があいつを何とか説得しろ。俺と付き合つてるとか何とか言つて」

「冗談やめてくれ。俺は早く教室に戻りたかったが、雪兎が俺の前に立ちはだかり、俺がこのミッションを承諾するまで行かさないと、いう姿勢を通した。

暑くて頭がふらふらする。どうまでもこの男はどうなのだ。

もう何にでもどうにでもなれ、と諦めの境地に達したとき、雪兎はもう一度俺を抱き返してきた。

「暑つ……ていうか、キモい……」

なす術もなく俺は雪兔の肩に顔を埋めため息をつく。  
その間も俺の背後にはびしひと嫉妬と嫉みの念がつき刺さつて  
いた。

俺は完全に雪兔の奴隸となつていく。

## 「雨の残り香」

授業中、頬杖をつきながら窓の外を見る。久しぶりの雨。窓際の席に座る俺の目の前の席が雪兎の席。国語の授業。熱心に黒板の文字をノートに書きうつし、先生の話に集中して聞き入っている。光源氏がどうのこうのとかいう授業。

先生が黒板の方を向いた隙に、俺は雪兎の背中をシャーペンの芯の方で軽くつついた。

「いてっ」と小さく声を漏らし背中を片手で押さえ、雪兎は俺の方を振り返り睨んだ。

「授業で分からぬことがあるんだけど、教えて」

勉強に関する真面目な話なら乗つてくれるかもしねないと思った俺は、そんな嘘をついてみた。

「どー……」

俺の予想は当たり、雪兎は嫌々ながらも少しじつちに身を乗り出してきてくれた。

「光源氏つてさ、何でそんな女にモテモテだったわけ?」

くだらないと思ったのか、雪兎は無言で前を向き直した。その後も何度も背中をつついたりしてみたが、奴はもう振り返らなかつた。放課後、今日こそは「懺悔の時間」を逃れ帰つてやろうと思つたのだが、下駄箱で奴は待ち構えていやがつた。

雨はまだ止まない。

図書館で俺はいつも「ぐぐー、雪兎の前にひれ伏し反省の言葉をべらべら述べさせられる。

「人の心の痛みも分からぬ人間でごめんなさい。軽率で浅はかな態度によって人を愚弄してごめんなさい……」

反省を述べてる間、雪兎は上から俺を見下ろしじつと見ている。

「ねえ、一体いつまで懺悔すれば俺は解放してもうえんの?」「下座してた顔を上げ俺は質問する。

「おまえが本当に心から反省して俺に誠意を見せるまでだ」

「当然だろと言わんばかりに雪兎は言った。

「反省してるじゃん。誠意見せてんじゃん？」

反論する俺を見て雪兎は首を横に振った。

「その開き直つた態度が反省してない何よりの証拠だ」

言われて何も言い返せなくなる俺。

「だいたい何がそんなにおまえの逆鱗に触れたわけ？」  
それを何より聞きたい。ここまで懺悔させられないとならないほどの大罪を俺は犯した覚えはない。

雪兎は椅子から立ち上がり、窓辺に立ち俺に背中を向けた。

「……俺にとつてこの眼鏡はカモフラージュのようなもので、コンプレックスを隠してくれる大事な防護服みたいなもんなんだよ」  
「だから何でそんなコンプレックスがあるわけ？」

さっきまで雪兎が腰かけていた椅子に俺は腰掛け質問した。  
開いた窓から雨の匂いが流れこむ。雨の匂いに俺は何かを思い出しあげた。

## 「忘却のかなた」

「おまえは覚えてないだろ？」「雪兎の言葉に俺は自分の記憶の中に引っかかる何かを引き出すつとした。けど、寸でのところでそれは消え去る。「高」に上がったばかりのとき、俺の後ろの席がおまえになつて、俺は内心喜んでいた」

「喜ぶ？」

「一体何の話をしているのかさっぱり見当もつかない。俺は目を開じその当時のことを光景を思い返してみたが、やはり何も思い出せなかつた。

「授業中、ふと眼鏡のレンズを拭い、眼鏡を取つたときだつた。おまえは眼鏡をとつた俺の顔を見てこう言つた……」

「何を言つたんだ。全然覚えてね。何かまずいことでも俺は言つてしまつたのか。雪兎はそれを根に持つてんのか。しかし、雪兎はその続きを喋りださない。

「……で、何て言つたわけ俺は？」

「そう言つと、雪兎がすんずん俺の方へ向かつて歩いてきた。俺は思わず身構え仰け反つた。殴られるのではないかと思つて。

「……おまえはこう言つた。“雪兎つて眼鏡とると、幼い顔してんだな”」

俺は拍子抜けする。

「それだけ？」

「唖然として口を開ける俺に雪兎の顔がこわばつた。幼いと言われたことがそんなに気に障つたのか。もつとひどいことを言つたのかと思つたが、たつたそれだけのことで、と俺は首を傾げる。

その時、俺ははつと突然思い出した。覚醒するかのようにある記憶が俺の思考を貫いた。

そうだ、そのあと俺はその日の帰り、傘をさして下校する雪兎を

追いかけて……

「そして俺にキスをした」

わなわな震えながら雪兎は言った。

「何でそんなことしたんだつけ俺？」

「またもやぽかんと口をあけて他人事のように言いつ俺に雪兎は、「んなこと俺が知るかあつ！！」と顔を真っ赤にして激怒した。たぶんきっとアレだ。眼鏡どると幼い顔してんだなと言つたとき、雪兎がやたらいてもたつてもいられない顔をしてうつむいたもんだから、それを愛おしく思つたんじやないのか？」

「うん。たぶんそんなところだろう」

自分の中だけで納得して腕組みしながらうんうん頷く俺の頭を雪兎がぶつた。

「自分の心の中だけで喋つて納得するな！ 理由を言え！ 理由を！ だいたい、なんでそんな重要なこと忘れることができるんだよ？」

「記憶力が良くなくて。まあ、簡単に一言に集約して言つとだな。好きだつたんじゃねエの？」

その言葉に奴はかたまた。

「ば、バカを言え。普段全然喋りもしないのに、何でそんな急に……」

……  
じどりもじどりに言つ雪兎。

「あ、それで、何で俺の前の席になつておまえは喜んでたわけ？」さつきから気になつていていた疑問を掘り返して再度聞く。

「それは……」

「それは？ 好きだつたから？」  
また頭を殴られた。

「おい、何回殴れば気がすむんだおまえは？！」

「おまえが先に言つからだろボケ！」

「だつてバレバレだし！！」

また雪兎がかたまる。反応があまりにも分かりやすくて笑える。  
だんだん奴をからかうことに快感を感じてくる俺。

「な、何がバレバレなんだよ？」

「おまえの態度だよ」

「とにかく俺はな、それから眼鏡をはずすことが嫌になつた。眼鏡をしていれさえすれば俺は安全でいられる！」

意味が分からぬ。それつて、幼いと言われたことよりも、俺から不意打ちを受けたことにに対する防御つてことじやないのか。

「意味がわからん」

部屋を去ろうとする俺の肩を雪兎がつかんだ。

「おまえはいろいろな意味で俺を見下したんだ。たつた今もだ。俺をもて遊んで楽しんでやがる」

ぎくりとする俺。楽しんでるのバレてたか。あははと頭をかいて笑い誤魔化す。

「だからだ、おまえは俺にいろいろな意味でこれからも懺悔してその罪を悔いねばならないのだ！」

怒りに震える雪兎を見るとまたからかつてやりたい衝動にかられる。俺は奴の頭に手を置いて「まあまあまあ」となだめすかした。

「だあつ！ またそういうつ！」

雪兎は俺の手を思い切り振り払つた。

「いいじゃん。俺のこと好きなんじょ？ もうここじゃんそういうことで」

俺の軽々しげにあつけらかんとした態度は雪兎を何度も怒らすことができるようだ。俺のその態度と物言いにまたぐちぐち愚痴る彼。「」の懺悔の時間だつて、俺と毎日一緒にいたいからなだけだろ」ふんぞり返り鼻で笑う俺。

「俺はこれまでまともにそんなおまえと話したこともなかつたし、おまえみたいなちゃらけた奴は嫌いだつた」

「え？ でも高一に上がつて席が近くになつた時から俺のこと好きだつたんじょ？」

つじつまの合わない雪兎の説明。

「俺が言つてこれまで”つてのは、高一の最初の時のこと”を言つてんだよ！」

思わず腹を抱えて笑う俺。どこまでさかのぼるんだよ。ていうか、一体いつから奴は俺を見てたんだ。

「で、いつから好きつてのに変わったわけ？」

笑いをこらえながら涙目で聞く。

「高一の途中……」

ぼそぼそと小さい声で雪兎は言つた。

「ふーん。何で嫌いだつたのにそうなつたわけ？」

「それも覚えてないんだな、おまえ」

覚えてるわけねーだろと思いつながら、また笑う俺。俺の知らないどこで、雪兎の中だけで俺との思い出がいろいろあるらしい。

「ある雨の日、俺が傘持つてなくて下駄箱で立つてたら、おまえが一本持つてたビニール傘の一本をくれたんだよ」

そんなことあつたつけ。まるで記憶にない。

「それ本当に俺？ 別人じゃなくて？」

「おまえだよ！ おまえという奴は何もかも覚えてないんだな！」

「覚えてるわけねーだろ。おまえ女みたいだな」

その言葉にまた言葉をつまらせる雪兎。また怒らせたようだ。延々と俺達の論争は終わらない。

## 「懺悔の終わつ」

俺の中で最も腑に落ちないことは、なぜ雪兎は俺に懺悔をさせ続けながらもそれと同時に進行で俺を好きでいるのかってことだ。本当に俺が好きなのか。

「いつして懺悔の時間は今日も無駄に続くのだった……」

放課後、今日も図書館で同じ行動を繰り返す。うんざり顔で窓の外を見やる俺に雪兎は、

「無駄とは何だ？」

と俺の制服のネクタイを引っ張った。

「もういい加減いいじゃん。反省してるよ。これからはもう一度とおまえを見下したりしません。誓います」

俺が右手を挙げそう誓いをたてると雪兎はネクタイを引っ張る手を緩めてつむいた。

「……おまえは俺のことどう思つてんだ？」

確信につく」と初めて雪兎の方から聞いてきた。

「どうして、まあ好きだけ？」

「友達としてか」

「友達にキスはしないだろ」

笑う俺のネクタイを雪兎はまた引っ張った。

「じゃ、このさいだから言つが、俺はおまえに懺悔しなければならないことがある」

急になんなんだ。俺達の会話はなんでもいつも毎回変な方へとふらつくんだ。

「何、懺悔しないといけない」とつて?..

俺が顔を近づけると、雪兎は深呼吸をした。声を発しようと汁は飲み込んでいる。

「早く言えよ」

無言が続く。もう一度「早く言えよ」と言おうとしたところで雪

「おまえがあの時キスしたのは……俺の双子の弟の方だ」

「おまえがあの時キスしたのは……俺の双子の弟の方だ」

「……」

俺は天井を見上げ、空白の思考に意識を浮かばせた。

双子?

「眼鏡を取った顔を幼いとバカにしたのは、俺との事だ。が、そのあとおまえがキスをしたのは俺じゃない。弟だ」

別にバカにしたわけじゃ……いや、それよりどうこうことだ。

「この懺悔の時間も、俺一人だけがやつてることじやない。弟と交互にやつてる。弟はおまえからキスされたことに腹を立ておまえを懺悔させている。俺は、眼鏡のことと、それと……弟と俺を間違えてキスをしたことに対してだ！」

「おい、聞いてんのか?」と詰め寄る雪兔の声が遠く遠くなる。俺は放心状態になつた。

「……お、弟つて何て名前なの?」

だるそうな顔で俺は聞く。もつなんかどうでもよくなつてきた。いろんなことが。

「弟の名前は、海斗うまとだ。ちなみに、弟は本当におまえのことを嫌つてている」

一番俺をもて遊んだのはおまえの方じゃないか。

どつからどこまでが雪兔で、どつからどこまでがその海斗なんだ? そのとき、図書室に誰かがガラガラとドアを開けて入つてきた。

「クローンだ!…」

叫ぶ俺。雪兔がもう一人いる。

「聖、おまえが好きなのは俺と海斗どつちなんだ?」

雪兔と海斗が同時に俺を睨む。

どつちつて、どつちなんだ。俺の中で雪兔は一人しかいないんだ。

どつちと言われても、どつちという区別がつかない。分からぬ。

俺は返事につまり、二人をいつまでも交互に見る。

俺はその場で土下座をし、今までで初めて、本当に心の底から懺悔をした。

そこでふと思はず。

「そういえばおまえに言い寄つてゐるつて、あの惺むさむつてのは、おまえらが双子だつて知つてんの？」

「知つてるよ。あいつは俺の方を好きだと言つた」

「俺の方つて、どつち……？」

今俺の田の前で喋つてるのが雪兔か海斗かもはや分からぬ。

「俺は雪兔だ！」

怒る雪兔。雪兔だつたらしい。

俺の懺悔はこの日で終了を向かえ、翌日からは訓練が始まるのだった。どつちが雪兔で、どつちが海斗かを見極められるようになるための訓練だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8926w/>

---

『懺悔の時間』

2011年9月27日01時26分発行